

研究主題

楽しく運動し，健康な体づくりをする子どもの育成
 ～ わくわく わいわい いきいき 雄飛っ子 ～

1 はじめに ～研究の主旨

新潟県の学校教育の重点では、「たくましく生きるための体力向上」が重点事項としてあげられ，基礎的運動能力の向上が課題とされている。体力向上の課題解決のためには，発達の段階に応じた適切な運動経験を通し，運動する楽しさや技能習得等の喜びを味わわせることが必要である。また，健康三原則（バランスのとれた食事，適切な運動，十分な睡眠）の継続的な指導も，体力の向上には大切なことである。学習指導要領の改善の基本方針に述べられているように，「保健と体育を関連させて指導すること」は，児童の体力向上に欠かすことのできないことである。

それらを踏まえ，当校では授業研究を中核に据え「体育」と「保健」の領域から，研究に取り組む。運動の特性や楽しさに触れる体育授業や健康な体づくりに寄与する保健授業の実践，及び望ましい生活習慣の定着を図る家庭との連携の取組を通して，教育課題の解決を図る。

2 研究主題設定の理由

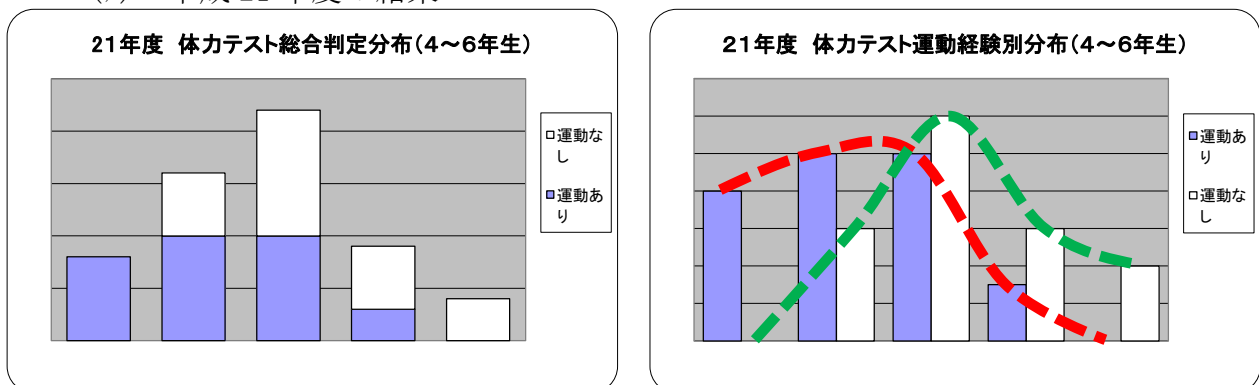
(1) 児童の実態から

研究主題の設定の理由について，児童の実態から述べる。児童の実態を，体力テストの結果とかかわりの様子の両面からとらえてみた。

ア 体力テストの結果

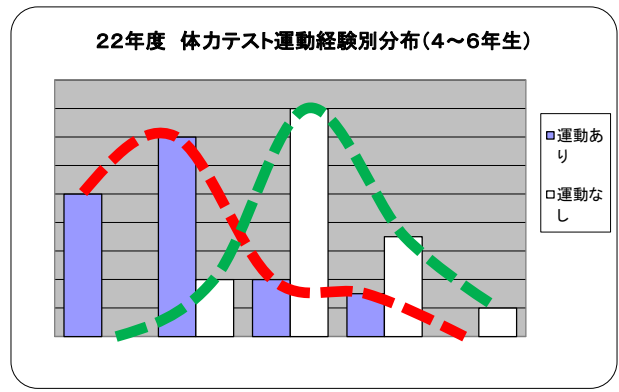
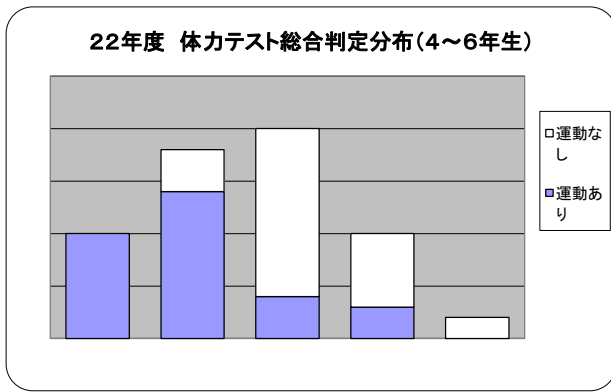
当校の体力テストの結果（平成 21 年度・22 年度）を，それぞれ図に表すと以下の通りになる。

(ア) 平成 21 年度の結果



- ・ A判定，B判定の児童の多くは，スポーツクラブ等に所属している児童である。しかし，普段から運動に親しみのない児童は低位の状況であった。

(イ) 平成 22 年度の結果



- 平成21年度と比較して、運動経験ありの児童には体力の向上がみられた。一方、運動経験なしの児童には、大きな変化がみられなかった。

以上2年間の結果から、普段から運動をしている児童と、していない児童の体力的な差がはっきりとみて取れる。このように、運動に関しての二極化が進む中で、運動を楽しみと感じ、目を輝かせながら意欲的に取り組む子どもを目指していきたい。

イ かかわりの様子

当校児童のこれまでのかかわりの様子をまとめると、次のようになる。

- 児童は、素直で明るく純真である。しかし、保育園からほぼ同じメンバーであるため、人間関係の固定化がみられる。
- 精神的に幼く自己中心的で、人とうまくかかわれない、相手の立場に立った言動をとることができない面がみられる。
- 体育の授業でもその傾向があり、特にゲームやボール運動などのチームワークを必要とする種目では、自分だけが楽しければいいという意識があり、周りとうまくかかわれない様子がみられる。
- 積極的に運動に参加できなかったり、話し合いでも自分の考えを言えなかったりするなど、消極的な側面から周りとうまくかかわれない児童もいる。

このように、積極的ではあるが自己中心的であるためにかかわれないということと、反対に消極的であるためにかかわれないということの二つの側面が現状としてある。

この状況を改善するために、言語活動を大切にしながら、人とかかわりから得られる運動の楽しさを体感させたい。

(2) 保護者の願いから

ア 平成21年度アンケート結果（保護者の記述）

- 「休みの日には、進んで体を動かしている。」
- 「体を動かすことがすごく好きだ。」
- 「もっと体を動かして遊んで欲しい。」
- 「なかなか運動に興味を示さない。」

以上のような保護者の声に代表されるように、家庭生活においても運動の取組の様子には個人差がある。それゆえ、保護者には、運動に進んで取り組んで欲しいという願いがある。

イ 平成22年度アンケート結果（児童・保護者）

表1 児童及び保護者アンケートの結果

質問項目	※「A評価：たいへんよい」及び「B評価：だいたいよい」の割合 (%)	
	児童	保護者
めあてをもって運動したり体を動かしたりして遊んでいる。	87.7%	77.7%

好き嫌いしないでバランスよく食事をしている。

児童 81.6%

保護者 75.9%

保護者の目からすれば、児童の評価に比べ、あまり運動に取り組んでいないという結果となった。また、保護者は、児童の自己評価に対し、食事に関して好き嫌いがあるとみている。このアンケートの2項目では、児童と保護者との間に意識のずれがあった。このずれを解消することが体力の向上と健康な生活への改善の鍵となる。

そのためにも、学校体育の取組はもちろんのこと、日常生活での運動の取組や規則正しい生活習慣の確立を、保護者と連携しながら進めていく。

3 研究主題・副題のとらえ

当校の研究主題は、「楽しく運動し、健康な体づくりをする子どもの育成」である。主題に迫るために、「わくわく わいわい いきいき 雄飛っ子」を副題として、3つの観点から研究に取り組んでいる。それら3つの観点のとらえを、次の表に示す。

表2 研究主題・副題のとらえ（目指す子どもの姿）

学 習 活 動		生 活 場 面
1 <u>わくわく～意欲的に取り組む体育・保健学習</u>	2 <u>わいわい～かかわって学ぶ体育・保健学習</u>	3 <u>いきいき～日常生活における健康な体づくり</u>
<子どもの姿> (1) 運動の楽しさに触れ、目を輝かせて運動する子 (2) 自分の生活を振り返り、健康な生活の仕方に気付く子	<子どもの姿> (1) 人とのかかわりから、運動の楽しさを知る子 (2) 人とのかかわりから、健康の大切さを学ぶ子	<子どもの姿> (1) 運動に親しみ、生活の中で運動しようとする子 (2) 健康の大切さに気付き、健康な生活をしようとする子

上記の子どもの姿を目指すために、以下に述べる内容・方法で研究を進める。

4 研究の内容

次の3つの観点（わくわく、わいわい、いきいき）を研究内容とし、それぞれの方策を実施することで、「楽しく運動し、健康な体づくりをする子どもの育成」を目指す。

1 わくわく～意欲的に取り組む体育・保健学習

(1) 運動の楽しさに触れ、目を輝かせて運動する子

- ア 「習得・活用」をバランスよく位置付けた指導計画の作成
- イ 目的意識が持続でき、意欲を喚起する単元構成
- ウ 見通しをもって学べる学習カードの改良
- エ 動画やイラスト、図等を活用した資料提示の工夫
- オ 1単位時間内50%以上の運動量の確保

(2) 自分の生活を振り返り、健康な生活の仕方に気付く子

- ア 具体物を活用した体験的な活動の工夫
- イ 自分の生活の振り返りと改善の機会の設定



2 わいわい～かかわって学ぶ体育・保健学習

(1) 人とのかかわりから、運動の楽しさを知る子

- ア 言語活動を充実させるための話し合いの視点の明示
- イ 自己の動きやチームの作戦を論理的に説明する機会の設定
- ウ 規則やルールづくりの話し合いなど、かかわりのできる場とかかわらせ方の工夫
- エ 動きを可視化し、かかわりを深めるための作戦ボードの活用



オ 生きた言葉が表出する雰囲気づくり

(2) 人とのかかわりから、健康の大切さを学ぶ子

ア ペア学習やグループ学習など、かかわりながら学び合う学習形態の工夫
イ 養護教諭，栄養士，歯科衛生士，保護者等と連携した指導の推進

3 いきいき～日常生活における健康な体づくり

(1) 運動に親しみ、生活の中で運動しようとする子

ア 体育授業と学校行事との連携指導

(ア) 運動会

(イ) 体力テスト（サーキット・ウィーク，チャレンジ・ウィーク）

(ウ) 雄飛の森班チャレンジ遠足

(エ) 大蒲原チャレンジレース大会（マラソン大会）

イ 児童会活動における運動の取組の推進

(ア) なわとび大会

(イ) 5色綱引き大会

ウ 体育学習環境の整備・構成，環境を生かした指導の推進

(ア) サーキット・ウィーク，チャレンジ・ウィークの場の設定

(イ) ランニングコースの整備

(ウ) 教材備品，自作教具の充実



(2) 健康の大切さに気付き、健康な生活をしようとする子

ア 保健指導・給食指導の推進

(ア) 歯磨き指導

(イ) 栄養士による食に関する毎月の指導

(ウ) 食育料理講習会

イ 家庭・PTAとの連携強化

(ア) 生活チェック週間の実施

(イ) 家庭教育学級の開催



5 研究の方法

(1) 研究の計画

3年間の研究を進めるにあたり、次のような計画を立案した。研究を段階的に推進することによって、研究主題に迫ろうと考えた。

< 1年次（平成22年度） >

「楽しく運動し、健康な体づくりをする子どもの育成」を目指した授業づくりを行う。「研究の内容」の方策を取り入れた研究授業を実施し知見を蓄積する。実践で得られた知見をもとに、研究の大枠を考案する。

< 2年次（平成23年度） >

研究授業を継続的に行い、研究協議会を通して、研究の方法論を洗練する。

さらに、研究の知見を整理分析することによって、研究全体図（次頁に示す）を作成する。

9月に中間発表会を実施する。

< 3年次（平成24年度） >

研究全体図をもとに、教師の支援策を具体化する。研究授業を通して、支援策の有効性を検討する。

(2) 授業研究を推進する手順

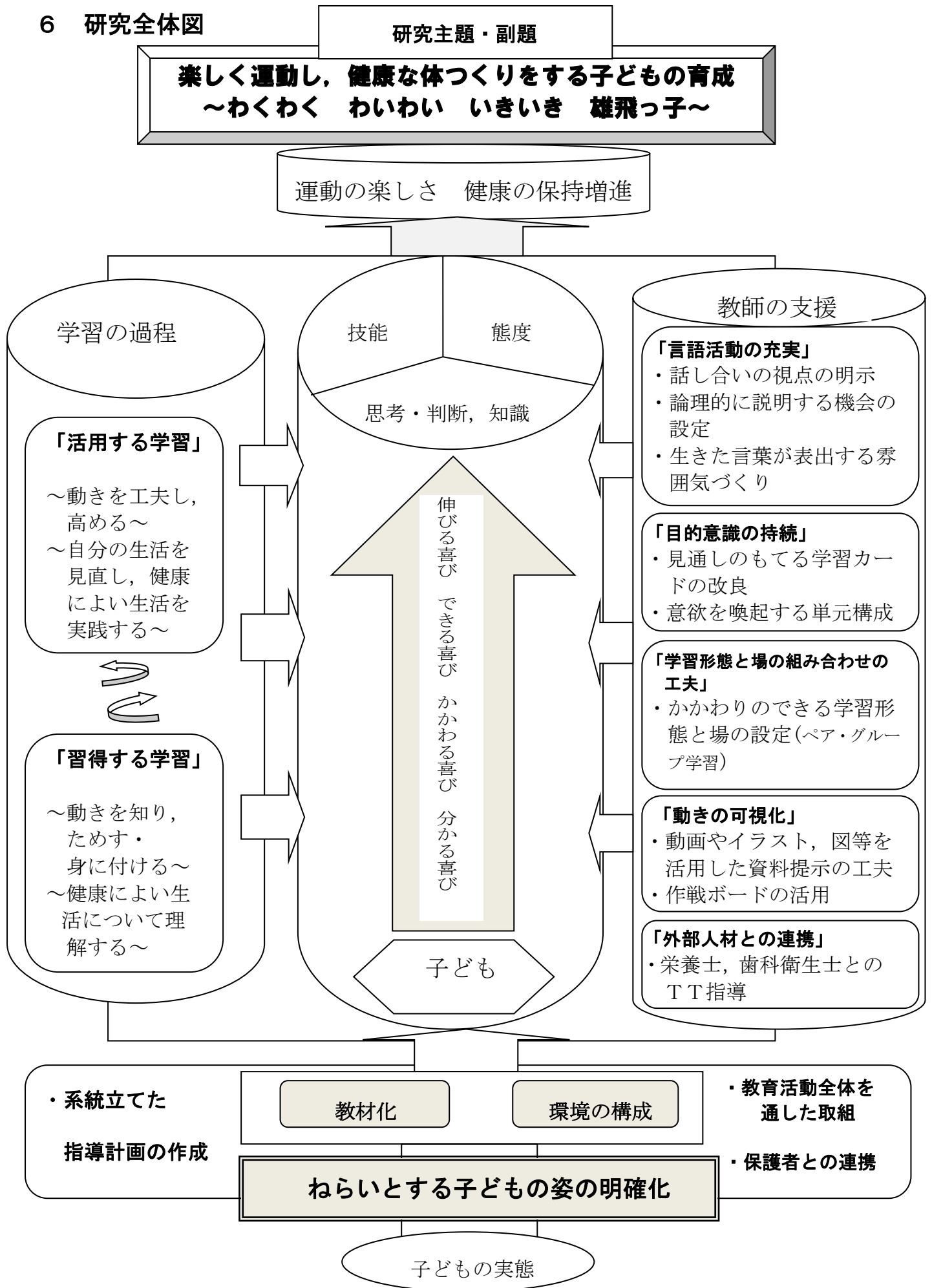
ア 研究授業前には、指導案検討会を行い、全員が授業づくりに参画する。

イ 研究授業を全員で参観したり、ビデオ録画したりして、記録をとる。

ウ 研究協議会では、授業記録をもとに授業改善の視点から協議する。

エ 指導者からのご指導を生かして、研究授業の成果を蓄積する。

6 研究全体図



7 研究の成果 ～具体的な指導とポイントを中心に

これまでの研究の成果について、3つの観点から、それぞれのポイントを整理する。

(1) わくわく～意欲的に取り組む体育・保健学習

ア 単元構成の工夫（ボール運動を中心とした新教材の開発）

◀ 単元構成のポイント ▶

- 運動種目の特性を吟味し、単元の系統性を考慮して、種目を選定する。
- 児童の実態に応じながら教材化を図る。

< ネット型ゲーム：「キャッチバレーボール」⇒「ソフトバレーボール」 >

中学年（4年）「キャッチバレーボール」

- ・単元の導入から基礎練習やゲームを軸としながら、児童にルールづくりをさせる授業を構成する。
- ・単元が進行していくうちに、児童はキャッチやパスのスキルを習得しながら、自分たちのチームに合った作戦が考えられるようになってきた。
- ・キャッチバレーボールの特性から、運動が苦手な児童も意欲的にゲームに取り組む姿がみられた。ソフトバレーボールへのつながりとなる種目である。

高学年（6年）「ソフトバレーボール」

- ・単元の導入では、キャッチバレーボールを継続した初期ルール（サーブは下から両手で投げ入れる。基本形：1回目はキャッチ。）を提示し、ゲームに取り組む。
- ・単元が進むにつれ、児童のスキルが向上したことから、初期ルールを改良しながら、ゲームを行っていった。
- ・キャッチバレーボールでの基本的なフォーメーションから、単元後半のゲームでは児童の判断で作戦を立て、フォーメーションを変えていく姿がみられた。

< ボールゲーム「的当てゲーム」⇒ゴール型ゲーム「フラッグフットボール」 >

低学年（1年）「的当てゲーム」

- ・段ボール箱や三角コーンを的にし、ボールを投げるゲームである。
- ・ゲームを通して、ボールを投げる動作やボールを止める動きを高めていく。
- ・攻めと守りの集団対集団の競争であり、チームとしての作戦が勝敗にかかわる。
- ・攻めと守りに分かれての作戦タイム後には、守りをかわすために位置を変えてボールを投げることや、攻め手の動きに対応し防御することを考えて、ゲームを行った。

中学年（4年）「フラッグフットボール」

- ・「的当てゲーム」同様、集団対集団のゲームであるが、個人個人に大切な役割や動きがある。ゴールを目指して、攻め側は多様なフォーメーションを考える。
- ・直接ボールを扱わない児童にも意味のある動きが託され、得点に役立っているという有用感をもたせることができる。
- ・実際のゲームでは、真剣に取り組む姿がみられ、ゲーム後の児童の振り返りにも、チームに貢献しているという意識の高まりがあった。



イ 学習カード・ワークシートの改良

◀ 学習カード・ワークシートの改良のポイント ▶

- 「学習カード」：学年の発達段階に応じて、チェック式と記述式のバランスを図る。
- 「ワークシート」：学習の流れが分かるように、項目内容を精選し構造化する。

学習カード⇒「振り返りカード」（運動領域）

- ・< 学習カード活用の効用 >
1 単位時間後の振り返りカードを活用することは、児童が運動技能の習得の程度を確かめたり、次時の学習のめあてをもったりすることができる。
単元全体のめあてに対する自己の位置付けを意識することにもつながる。

・<学習カード活用の留意点>

1 単位時間内 50%以上の運動量を確保するために、カードを記入する時間配分や記入する分量に留意する。

・<学習カード改良の要点>

学年段階に応じて、チェック式と記述式のバランスを配慮する。

・<授業者にとっての学習カード>

児童の学習カードは、授業者の振り返りにもつながる。学習カードの記述内容は、授業の反省や次時の授業づくりにつながる。授業者にとって貴重な資料となる。



ワークシート⇒「学びシート」(保健領域)

・<ワークシート活用の効用>

保健のワークシートは、児童が学習内容を理解し思考判断したり、学習の振り返りをしたりすることに活用する。授業では、児童が真剣にワークシートを記入する姿やワークシートをもとに意見を発表する姿がみられた。

ワークシートの活用は、児童の学習意欲を喚起するとともに、「学びの履歴」となる。

・<ワークシート活用の留意点>

学習内容を習得し話し合い活動を活発にするために、書く活動を授業に確実に位置付ける。ワークシートに書く時間を確保し、書くことが苦手な児童に対しては、机間指導をして助言をする。

・<ワークシート改良の要点>

学習項目を精選し、1 単位時間の学習の流れがワークシート上に表れるように構造化する。学年段階に応じて、ワークシートのレイアウトを工夫する。また、図表やイラスト、写真を入れ込み、児童が取り組みやすいようにする。



(2) わいわい～かかわって学ぶ体育・保健学習

ア かかわらせ方の工夫

《 かかわらせ方の工夫のポイント 》

- かかわりのできる場を設定し、学習形態を意図的に組み合わせながら、言語活動を充実させていく。
- 発達段階に応じて、教師主導から児童主体にかかわらせ方を変えていく。

<かかわらせ方の形態>

中学年(4年)保健「目指せ健康マン(育ちゆく体とわたし)」

⇒グループ学習：問題別グループに分かれ、少人数で問題について調べ話し合う。

⇒一斉学習：問題別グループで調べたことを紹介し、学習成果を全体で共有する。

高学年(6年)保健「病気の予防」

⇒一斉学習：薬物乱用について全体で話し合い、薬物乱用の悪影響について考える。

⇒ペア学習：一斉学習で出された意見を基に、二人組になって行動リハーサルを行う。

⇒個人学習：授業で学習したことを振り返り、ワークシートにまとめる。

<かかわらせ方の段階>

低学年(1年)体育「的当てゲーム」

⇒教師主導で、作戦を考えさせる話し合いの場を設定する。

中学年(4年)体育「キャッチバレーボール」

⇒ゲーム前とゲーム間に作戦タイムを設定し、チーム内での自己の役割や動きを確認し、考えを加える。

高学年(6年)体育「ソフトバレーボール」

⇒ゲーム中に児童が自分たちで判断してタイムを取り、チームの改善点について話し合う。

<かかわらせ方の工夫による効用>

- ・6年「ソフトバレーボール」の授業評価(24年度実施)で



は、「体育は楽しい」という項目において5段階評価を行った。その項目の評価結果を、単元の事前・事後で比較したのが、次の表である。

表3 児童の授業評価（6年体育）

※「A評価：とてもそう思う」及び「B評価：ややそう思う」の割合（%）（24年度実施）			
質 問 項 目	結 果		
	体育は楽しい	事前	89%

- ・単元前のA B評価は89%，単元後のA B評価は94%であり，単元前より5%数値が高まった。
- ・児童の自主的な判断で行われた話し合い（作戦タイム）により，チームとしての動きがよくなったことが楽しさやできる喜びにつながり，意欲面の肯定的な結果に反映されたと考える。
- ・「わいわい」の方策として，かかわりのできる場とかかわらせ方を工夫し，教師の発問によって話し合いの視点を明示することにも取り組んできた。
- ・「わいわい」の方策が，動きの向上やチームの仲間とかかわる喜びに結び付き，「わくわく」としての学習意欲にも相乗効果を及ぼしたと思う。

イ 作戦ボードの活用

◀ 作戦ボードの活用のポイント ▶
 ○ 児童個人の動きやチームのフォーメーションを可視化し，かかわりあいを機能させる。

作戦ボード⇒「ホワイトボード」の活用

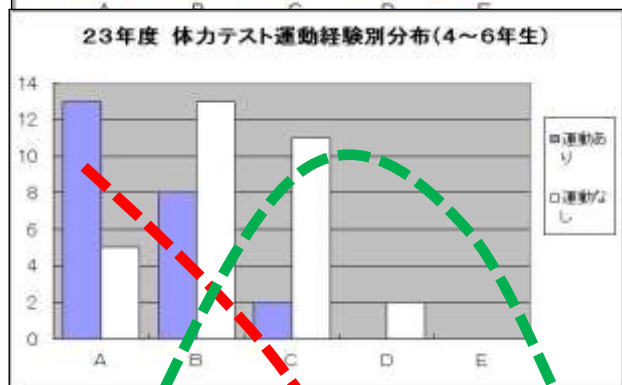
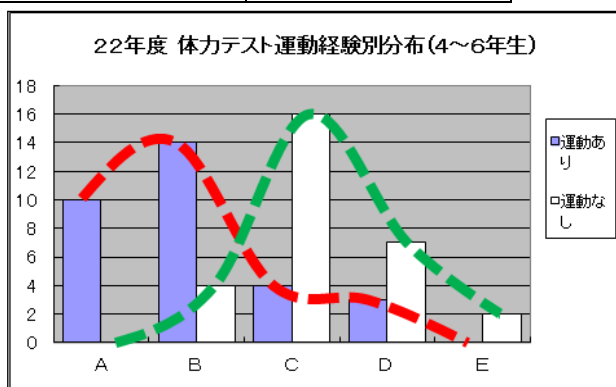
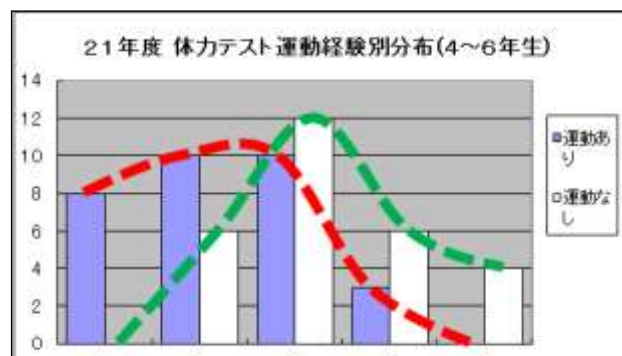
- ・かかわりあいを機能させる道具として「作戦ボード」をゲームの授業で活用した。
- ・児童が書きこみや修正をしやすいように，作戦ボードには「ホワイトボード」を使用した。
- ・作戦ボードを活用した実践授業では，児童一人一人が話し合いに参画し，自己の動きの修正をしたり，チームとしての新しい作戦を考えたりする姿がみられた。
- ・作戦ボードを活用することによって，児童の動きを可視化し，話し合い活動を円滑にすることができる。

(3) いきいき～日常生活における健康な体づくり

ア 体力向上への日常の取組

<表3 体力テスト結果の年度比較>

年 度	全校平均が県平均を上回る種目数（8種目中）
22年度	4種目
23年度	7種目



- ・体力テストでは、全校平均で県平均を上回る種目が、平成22年度は8種目中4種目であった。平成23年度では、全校平均で県平均を7種目上回る結果となった。
- ・図を見ると、平成21年度の結果で問題となった運動経験の差異による2極化の傾向が改善されていることが分かる。
- ・22・23年度では、運動経験なしのグラフの山が右側（E）から左側（A）の方に動き、B判定の児童が4名から13名に増えた。なおかつ、E群の児童がいなくなった。
- ・21・22年度では、運動経験なしの児童はA群に存在しなかったが、23年度には5名の児童がA群となった。
- ・日常の授業実践や体力づくりに励む全校の教育活動を通して、児童が運動の楽しさや喜びを実感したことが、運動に進んで取り組むようになり、体力向上につながったと考える。

(ア) 体力向上強調ウィーク（サーキット・ウィーク、チャレンジ・ウィーク）の設定

《 体力向上強調ウィークの設定（1学期）に関わるポイント 》

- 運動環境作りや用具に配慮を施す。

児童が楽しみながら運動に取り組む⇒「サーキット・ウィーク」の設定

- ・サーキット・ウィークでは、フリータイム（業間）に児童が楽しんで運動に取り組めるように、種目別コーナーを設け、運動環境にも工夫を凝らした。
- ・ボール投げでは、体育館のコーナーに、ストラックアウトのような掲示物を表示し、児童が投げることによって得点を競う状況を設定した。
- ・低学年の児童でも、興味・関心をもって進んでボールを投げる姿がみられた。

児童が進んで体力づくりに取り組む⇒「チャレンジ・ウィーク」の設定

- ・体力テスト前には、チャレンジ・ウィーク期間を設定する。
- ・体力テストの各種目に、フリータイム（業間）に学年ごとにローテーションで取り組む。
- ・グラウンドに設けたソフトボール投げの会場では、児童が自分の投力を認識しやすいように、距離ごとに動物キャラクターのフラッグを掲示した。
- ・児童は楽しんでソフトボール投げを行い、フラッグがあることによって、自分の投力の位置が即座に分かり、次への向上心をもたらした。

(イ) チャレンジ・マラソンの実施

《 チャレンジ・マラソンの実施（2学期）に関わるポイント 》

- マラソンロードの整備と教師の伴走による声かけを行う。

児童が運動のめあてに挑戦する⇒「チャレンジ・マラソン」の実施

- ・2学期のフリータイムでは、チャレンジ・マラソンを実施する。
- ・全校マラソン大会の前に、児童が自己のめあて達成に向かって、マラソン・カードを活用しながら、練習に励む。
- ・当校には、校地内に森の中も走れるマラソンロードが整備されている。
- ・チャレンジ・マラソンでは、児童とともに、教師も伴走し、マラソンが苦手な児童に励ましの言葉をかけたり、マラソンが得意な児童にはさらにタイムが向上するよう助言を行ったりしている。
- ・全校マラソン大会を観戦した保護者や地域の方々からは、児童の真剣な走りや最後まであきらめない姿勢に、感動したといった声が多数寄せられた。日々のチャレンジ・マラソンの取組が、マラソン大会の盛り上がりにつながった。

(ウ) 個人と縦割り班を組み合わせた、なわとび・チャレンジの実施

《 なわとび・チャレンジの実施（3学期）に関わるポイント 》

- 大なわで、1回に跳ぶ人数が多くなるほど得点上がる特別ルールを採用する。

児童がかかわりながら運動する⇒「なわとび・チャレンジ」の実施

- ・3学期のフリータイムでは、個人と縦割り班を組み合わせた、なわとび・チャレン

ジの取組を行う。

- ・全校なわとび大会の前のフリータイムに、曜日ごとに個人種目の短なわと縦割り班（団体種目）による大なわを練習する。
- ・個人種目の練習では、学習（なわとび）カードを活用し、個人のめあて達成に向けて練習に取り組む。
- ・縦割り班による大なわの練習では、一回に跳ぶ人数が多くなるほど得点上がる特別ルールを採用し、班で作戦を考える活動を仕組む。
- ・大なわの練習では、高学年の児童が優しく低学年の児童に教えたり、班で跳ぶ人数を考え繰り返し練習したりする姿がみられた。
- ・全校なわとび大会では、縦割り班対抗による大なわで、体育館に熱気があふれた。

イ 保護者・家庭との連携

◀ 生活習慣に関わる保護者・家庭との連携のポイント ▶

○ 寝る時間と起きる時間を、保護者と子どもと一緒に考える。

生活を振り返り、健康な生活の仕方に気付く⇒「生活チェック週間」の設定

- ・児童が自分の生活習慣を振り返り、未定着な項目を改善するための機会として、生活チェック週間を設定する。
- ・「決めた時間に寝る・起きる」「朝食をしっかりと食べる」という項目について、各家庭の協力を得ながら、定期的実施する。
- ・生活チェックカードには、週間終了後、保護者がコメントを添える。
- ・平成23年度に2回実施した「児童アンケート」の結果を比較する。児童に対する質問項目「早寝・早起きができ、朝ご飯をしっかりとることができる」において、5段階のA B評価の回答で、7月は81.7%であったが、12月は90.4%と高い数値を示した。
- ・生活チェック週間の定期的実施など、家庭と連携した取組が児童の自己評価の高い結果に結び付いた。

表4 生活習慣に関する児童アンケートの比較（7月と12月）

児童の自己評価	
※「A評価：たいへんよい」及び「B評価：だいたいよい」の割合（%）	
平成23年度実施	
質問項目	結果
早寝・早起きができ、朝ご飯をしっかりとることができる。	7月 81.7% 12月 90.4%

- ・「生活チェック週間」の実施は、児童が自分の生活習慣を振り返ったり、保護者が児童の生活習慣の様子について留意したりすることができた。
- ・「生活チェック週間」を意図的継続的に実施したことが、保護者への啓発とともに児童の健康に関する意識や生活習慣の改善につながったと思われる。
- ・望ましい生活習慣の定着と体力の向上は、密接な関係がある。
- ・「いきいき」の方策としての家庭との連携の強化や保健学習によって、健康な生活をしようとする児童の意識が高まり、それが体力の向上にもつながったと考える。

ウ 外部人材の活用

◀ 外部人材（栄養士）の活用のポイント ▶

○ 学習形態を工夫したティーム・ティーチングを行う。

生活を振り返り、健康な生活の仕方を学ぶ⇒「栄養士とのティーム・ティーチング」

- ・自分の生活を振り返り、健康な生活の仕方を学ぶために、専門的な知識を有する外部人材との連携指導を行う。
- ・保健学習では、栄養士とのティーム・ティーチングを行った。
- ・専門的な知識を有する栄養士から、わかりやすく講義をしていただいたり、児童からの質問に丁寧に答えていただいたりする活動を通して、児童は意欲的に保健学習に取り組むことができた。

8 今後の課題

研究がスタートする前の平成21年度と平成23年度の体力テストの結果を比較すると、児童の体力は如実に向上している。また、健康に関わる生活習慣が徐々に改善されていることも、アンケート結果から示された。このような成果は、「わくわく（意欲）：わいわい（かかわり）：いきいき（生活の振り返り）」の3つの観点から研究を推進してきたことの表れといえる。

さらに、児童の生涯にわたって運動に親しむ能力や健康な生活を送る資質を向上させるために、次の2点で授業改善に取り組んでいく。

(1) 系統性を考慮し、魅力ある単元を構成する

楽しく運動し、健康な体づくりに取り組む児童を育成する重要な鍵は、魅力ある教材を開発することにある。フラッグフットボールやキャッチバレーボールといった新教材の開発によって、児童が楽しく仲間とかかわりながら運動に取り組むことができた。

さらに、系統性を考慮した魅力ある種目を選定し、当校なりのアレンジを加えた単元を構成していく。ボール運動以外の領域の教材開発にも取り組んでいく。

(2) かかわらせ方を工夫し、言語活動の充実を図る

「運動領域」

主にゲームにおける作戦タイムの取り方など、かかわらせ方の工夫を行ってきた。児童の発達段階に応じたかかわらせ方が、児童の意欲の向上につながってくることが実践を通して分かった。さらに、チームでの作戦会議などの言語活動を充実させ、話し合いの質を高める。そのことが、運動量の確保につながる。

「保健領域」

授業でグループ学習を位置付けるなど、学習形態の組み合わせを工夫しながら、かかわりのできる場とかかわらせ方の工夫を行った。仲間や外部人材とかかわりをもつ場を設定し、学習形態を工夫することで、健康に関する実感を伴った理解につながり、体づくりに対する前向きな意識の向上をもたらしたと考える。健康な体づくりを意識し、生活習慣を改善する児童が増えてきた。保健領域における確実な知識の習得と日常生活に知識を活用するための効果的な人とかかわらせ方を、さらに研究していく。

以上の点の課題解決に向けて、児童に運動の楽しさや喜びをさらに経験させていく。今後も、運動のスキルや保健の知識を確実に習得・向上させていく体育科授業の在り方を追究していく。